

土佐物語

自二十三  
至二十四

十二

和書門類			
二五〇七七	九	一	一
號	函	架	冊
五	三	五	五

內閣文庫			
二五〇七七	一五	一	一
號	冊	架	函
七	五	三	五
(一五)			

內閣文庫	
番號	和 25077
冊數	15(12)
函號	151 127



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



土佐物語卷第二十三

目錄

秀頼公大坂一揆玉小事

元親率去付雪隠寺の事

石田治部少輔逼塞の事

景勝関東下向の事

上杉家傳の事

土佐賀物屋語

二十三 二十四

内房岡原の法進寺の事

越前國一揆の事

明治十年謄寫

土佐物語

土佐物語卷第二十三

目錄

秀頼公大坂へ移る玉事

元親奉去付雪隠寺の事

石田治部少輔逼塞の事

景勝関東下向の事

上杉家傳の事

加賀陣耀一の事

内府関東へ志進祭の事

越前國一揆の事

明治十年騰寫

石田大谷軍談の事

関東一両使の事

石田大谷軍談の事  
関東一両使の事  
石田大谷軍談の事  
関東一両使の事  
石田大谷軍談の事  
関東一両使の事  
石田大谷軍談の事  
関東一両使の事  
石田大谷軍談の事  
関東一両使の事



佐物語卷第二十三

秀頼公大坂へ移り給ふ事

故大岡吉治世の程ハ天下悉く帰服して萬民無

宿の化し跨り事あり大岡倭主薨一給ふ國家の

柱石擁事あり天下今とつらとつと下勤き悲

しと事ありの果しと世の中何とあり物騒しく

人び疑ひ身を危しと衆はうらうらひ黨は組と東

西に雲起り西北に風吹んと世の危き事只落

水は臨むありと上り人より下萬民に至る

て且夕に美味は忘る安く夢見ふ夜半とあり

跨り

石田大谷軍談

元平  
親の  
輔

きいそめき合ひ事向の思ひ合ハ事ふ世に成て  
盛衰及覆さふ人多うと事向中よと出曾我部  
官内少輔元ハ数代土佐国に安座し家門の  
繁昌しハ子息古御門方親善親不慮  
よ一念の思ひよ依て去く其家出失ひ給ふ其始  
終は成て是は語すハ語去く是は訖せハ文拙く  
彼人情見家人倦玉ハとハハと奉束を  
尽せし思ハ其事詳々あふ事繁ふらくハ地出  
りて自忘忘ふくハ似ハ事出凡天地の道ハ  
くハ始りしつくと終ふと云事あく環のこハ

きのあとし仲夏の炎暑ハ冬至一陽来復よと  
中月嚴冬の素雪ハ夏至ハ天より機をとや石  
田沼部少輔之成ハ江戸内大臣家康公の臣威光  
そねと彼出亡ハ已ゆ立んと企ハ其悪念江州佐  
和山に起て遠く土佐国よ及て出曾我部出失と  
きり戦国の習ハ珍らハりハをと云あハりハり  
うてりりふ事とと之さ事程ハ明と慶去四  
年正月十日秀頼公伏見より大阪の城に移ふと  
給ふ是方閑法遺云ハ依て之加賀大細言利家卿  
幼少の若宮の守護ととて大阪西の丸に遷ら

内  
務  
省

予其余の大名小名皆大段一住宅を移せり  
斯りし故太閤北の政所、大段西の九子  
座有る所に出し、その洛陽三幸木とし、所  
へり、その給ふ此所、故殿下、世の時、縄  
強有て築き、阿古、傲の地とし、一、一の  
要害、構一し、と寂多所あり、室も、一、方、閣  
の、座、所、と、ハ、云、あ、り、は、位、馴、給、ひ、一、西、の、丸、出、出  
す、も、せ、給、ひ、ハ、心、の、内、と、痛、と、一、同、十、一  
日、より、十五、日、迄、継、司、の、世、礼、有、上、下、萬、軍、也、と、唱  
へ、り、不、斯、不、目、出、中、と、ハ、世、ハ、一、と、見

一、一、爰、内、大臣、家、康、公、伏、見、の、信、館、ハ、貴、賤、性、置  
の、街頭、と、して、宣、一、と、向、島、と、移、せ、也、然、る、  
一、と、詮、像、有、て、向、島、と、二、所、四、方、と、屋、取、取、あり、人  
夫、集、め、向、島、と、堀、を、あり、柵、あり、材、木、公、運、ハ  
善、請、の、し、と、あ、り、志、き、り、あり、善、請、奉、就、の、所、と、伏  
見、の、城、は、借、り、給、ふ、と、徳、善、院、云、以、法、印、と、信  
相、談、有、て、信、入、城、被、奉、是、の、と、ハ、内、府  
の、計、ら、ひ、と、一、と、数、多、縁、也、定、め、ら、は、松、平、因  
幡、守、康、元、息、女、は、福、島、左、衛、門、右、主、正、則、の、息、備、後  
守、忠、信、ハ、小、笠、原、共、部、大、主、秀、政、息、女、は、輝、須、賀、阿

の下息  
字脱

波守家政の 長門守至慎一池田三左衛門輝政息  
女は伊達陸奥守政宗の息越前守忠宗一是皆内  
府の親族之是は波守多し人毎に諸大名の縁組の  
公義に違ひ其と云ふ申定りしきより右閣の  
控多し事外中一と違せを和縁組申定り  
多し事曲事の至り之と上下展以難一と大政  
て四人の大老事外中右閣の薨去密程とあり  
内府控は皆うじて天下の政法立一うを況  
伏見に推して在場之事とを薨如左の辨控う  
そ幼君の信仕至初めは緩くの御法に及り不

中村三後  
文目七  
輔

義の輩絶一うを急に詮縁有一として西月  
一日中村 右輔生駒雅楽頭堀尾帯刀台去老  
使として伏見一申を色事候ハ右閣の控は  
皆し和縁組取結し事又伏見の城に推  
て居候の事幸以の外は信跡は後存念義不  
一とを申すより内府四人は向て御事候ハ  
当城は事各見分の通日向島は幕請いし  
其間借事之何と一申し御事候ハ一は  
云一とと僅の不と在し其縁に及り可云以法  
印に申し譲り相移り事之全く推して入場せしむ

内  
務  
省

意上系雅  
以下同

ふよ所の可向島の普誌出来次第より早速引越せ  
 一 一 次は縁辺の事な程思ひ志して後 意よ  
 任せらるゝ事な程此段よく申し給ふ一とと  
 仰せ奉る其夜沿部少輔倫々伏見一人して申  
 せせらるゝ老中より下り申入らるゝ事  
 一 一 辭承り下り申す事思惟者多一と云々  
 一 一 仰せ給ふらるゝ然る一とと申す事は是の  
 こと所より三成懇切の儀とと云々有て内府と  
 悦ひて給ふ後と思ひ仰せ給ひ三成の謀計と  
 云々云々の梅のうらうら大阪より三成の四人又

門 藤 雀

使者として別處ある事急度大阪一と下り有  
 て其旨仰せ披り給ふ一とと申されり大臣殿  
 最前と申告り給ふ一と今に至り申披きとして下  
 り時ハ 諸事所より似て考問今暫く日以経て罷  
 下り給ふ一とと仰らるゝ事大老奉儀の面々叔  
 ハ 意欲振廻るゝ事ハ 意欲振廻るゝ事ハ 意欲振廻るゝ事  
 一 一 一と軍評定と云々之是は此段にて池田三左衛  
 門 福島左衛門大夫有馬主蕃允輝須賀阿波守伊  
 達陸奥守黒田甲斐守加藤主計頭赤松始として  
 急き伏見一馳参り大谷刑部少輔ハ私宅より人数

内 藤 雀



此集の内府に加勢せんとして待居るは安江細川  
越中守忠興の利家と内縁のとすは所也又家康  
公と故有て因に深しりうとて和義の調一  
静證の致も事且の公義の良書之として加賀大細  
言の子息羽柴肥前守利吉の旨より向て申され  
り候は近目伏見の政ら多く死とに評議専らよ  
其此縁より良思案考しひそり事の様は  
伺ひ考し老中事外奢肆の心甚しく考とりと  
と大臣殿大細言殿おとし候し考故其色は立不  
事も考しそ然りとしとと大細言殿は長年勤

とりは伝違例と申理目と計り考し候て内  
府を目当よりして利家卿存在世の内は申計らひ  
と意と号し内府は失ひ申をんとしと考内府  
之ひて後殿の取立申候候と事外申うと存し  
考し殿のり考し若くおし考し考し一は押付  
考し老中意は振舞考し事眼筋は考若又殿是  
は憤り給ひ考し考し考し考し考し考し考し  
然し内府は亡をせんは考当家滅亡の基ひと  
考此は僅の過失と流石内府の一家討果も  
考考し人の以の外のひ考事之老中事外大臣殿

此等ハ仰ク思ハキトシハト力ニ及ハサシ  
依テ事ヲ大古ニシテ僅ノ過失ニ事ニシテ利家  
卿ハ進メ事不事疑ハキ一今此ニ信ニシテ假令  
内府ニ有ル所ハ一五ノ去後ノ災計ニシテ其  
時必ク後悔ニシテ一只強クハ内当家ト内府ト  
和順有テ内府ニ事ニ疑ハキ利家卿不慮ノ事ニ  
ト内府ハ天性真実<sup>篤</sup>厚ノ人ニ事ニハ内当家一  
諫畧多ク一両家求莫ノ思ハキ事ニ人ニ於テ  
ハ老中事ニシテ計リ思ハキ事ニ叶ハシテ  
是振ニ事ニシテ一帯ニ堅ク事ニ計畧ニ事

一ハ此言大納言殿一トシテ仰ク事ニ  
理ハ尽シテ申シ事ニ其後利家ノ家老神谷  
信濃所山伯普徳山五岳徳山呼テ此事ニ云合  
大納言殿ニ諫メ事ニ一トテ歸ル事ニ利家  
父子此詞ニ深ク信服有テ三人ノ中老英台長  
也招テ利家卿宣ハキ事ニ一トシテ異處出来ノ時  
ハ四人トシテ取扱ハキ事ニ一トシテ右ノ内  
上ハ各扱ハキ事ニ一トシテ宣ハキ事ニ一トシテ  
内府ニ事ニ取扱ハキ事ニ一トシテ二月五日終ニ  
事ニ一トシテ事不其後忠興侍野左京大夫加藤主

計頭をいりしりし利家卿にきりて平上伏見へ  
信越有て大臣殿と召入意の由契納考へしと申  
すししりし大細言殿さしはして二月廿七日船  
場より舟より伏見へ上り給ふに主計頭左京大  
夫越中守扈<sup>徳</sup>とてとまふりて丁寧の由饗  
急りし限りあり預て大坂へ歸り給ふ家康公信  
返礼として三月十一日大坂へ舟より召下り西  
の丸へ入らせ給へし利家父子悦ひき向く所儲  
有て其夜中の島蓀堂伏見守の宅より一宿の  
よりれし例の人より大勢集りて給ひり石田

治部少輔ハ山西振津守の宅より給て兼て云合せ  
し人より招て鬼ヶ角内府の御殿心得うしし家  
々御末の警とあり人事疑ひあり西葉成されし  
斧柯御用也と申事ゆきとや今宵幸の時あり何  
也と思召立給へしと申すしりし事多き集り人々  
ハ宇喜多中細言秀家會津中細言景勝色利中細  
言輝元佐竹左京大夫兼宣生駒雅正頭近世増田  
右衛門尉長壺長東大將右輔正家あり各を結  
あししと一決して既し軍勢集めんとせりし  
事多し右衛門尉申すしりし是程の大事ゆき

内  
務  
省

忽ハハシクあり人出せハハハ梅内出見せよ  
として十二人中の島へ出せし事ハ又丑ノ刻計ニ歸  
りて申事ハ中の島の神大各小各大勢集り其  
と見一て焼燈數多りりて日中の如くも多  
倍の人数ハ一勢と引分佐治守殿の士隙透  
あく夜廻りして中々稠密用心の神と者と申事  
是ハ各業よ未達してりてされ事不程と夜とい  
くく更々是と此事空しく止よ事と翌朝大臣殿  
伏見へ歸り給ひ事其後向島の善請出給して  
三月十九日新宅へ移り給ひしハ都鄙の沙汰

ハ止よ事

元親卒去 付 雪蹊寺の事

慶長四年の春長曾家部宮内少輔元親正四位少  
将士佐守とありしり家家の面目何事の是よ  
如の人と悦び給ふ事限りあり頻て信礼の出仕  
祝儀の作法よりこのころ執り給ひあり所は  
慈悲の如く不習ひ些し心地例ありと嘆之し  
の日以逐て身心苦痛し各函の良薬と験あり是  
僧の懇祈と叶いし同年五月十九日春秋六十一  
より忽ち卒去し給ふ雪蹊寺と謚を在せよ

内務省

授<sub>レ</sub>給<sub>ス</sub>符号法名あり嗟呼此人先祖より僅<sub>ニ</sub>  
三千貫<sub>ノ</sub>領事數代あり<sub>テ</sub>天運循環して  
一<sub>ニ</sub>返<sub>ル</sub>四國<sub>ノ</sub>掌<sub>ニ</sub>握<sub>リ</sub>方<sub>ノ</sub>閩<sub>ノ</sub>秀<sub>ノ</sub>公<sub>ノ</sub>屬<sub>シ</sub>て請<sub>フ</sub>  
<sub>ニ</sub>祭<sub>ト</sub>向<sub>テ</sub>一<sub>ニ</sub>組<sub>ト</sub>鮮<sub>ノ</sub>の<sub>レ</sub>役<sub>ト</sub>出<sub>ル</sub>り<sub>テ</sub>墨<sub>ヲ</sub>推<sub>ク</sub>  
事<sub>ノ</sub>其<sub>ノ</sub>數<sub>ヲ</sub>志<sub>ス</sub>る<sub>ル</sub>も<sub>テ</sub>勇<sub>名</sub>以<sub>テ</sub>漢<sub>ノ</sub>家<sub>ノ</sub>本<sub>ノ</sub>朝<sub>ノ</sub>と<sub>シ</sub>て<sub>一</sub>武  
門<sub>ノ</sub>棟<sub>梁</sub>あり<sub>ト</sub>と<sub>ト</sub>無<sub>常</sub>の<sub>レ</sub>敵<sub>ハ</sub>路<sub>ク</sub>も<sub>テ</sub>便  
あ<sub>ク</sub>徳<sub>ヲ</sub>以<sub>テ</sub>裁<sub>キ</sub>恩<sub>ヲ</sub>慕<sub>ル</sub>る<sub>ル</sub>の<sub>レ</sub>其<sub>ノ</sub>數<sub>ヲ</sub>志<sub>ス</sub>る<sub>ル</sub>とい  
一<sub>ニ</sub>号<sub>ト</sub>と<sub>伴</sub>あり<sub>ト</sub>と<sub>テ</sub>臺<sub>人</sub>と<sub>テ</sub>あ<sub>ク</sub>遂<sub>ニ</sub>黃<sub>泉</sub>に<sub>テ</sub>赴<sub>キ</sub>給<sub>ス</sub>る<sub>ル</sub>  
と<sub>シ</sub>て<sub>一</sub>事<sub>ト</sub>と<sub>ト</sub>之<sub>レ</sub>遺<sub>言</sub>に<sub>テ</sub>任<sub>セ</sub>洛<sub>陽</sub>天<sub>童</sub>寺  
にて<sub>一</sub>火<sub>葬</sub>を<sub>レ</sub>導師<sub>ハ</sub>策<sub>彦</sub>和<sub>尚</sub>之<sub>レ</sub>法<sub>選</sub>骨<sub>ヲ</sub>以<sub>テ</sub>土<sub>伏</sub>

被<sub>レ</sub>爽<sub>欣</sub>

国<sub>一</sub>下<sub>ニ</sub>て<sub>一</sub>吾<sub>州</sub>郡<sub>ニ</sub>出<sub>テ</sub>高<sub>福</sub>山<sub>ノ</sub>慶<sub>雲</sub>寺<sub>ヲ</sub>造<sub>營</sub>  
て<sub>一</sub>骨<sub>ヲ</sub>以<sub>テ</sub>細<sub>メ</sub>木<sub>像</sub>以<sub>テ</sub>安<sub>置</sub>る<sub>ル</sub>位<sub>牌</sub>以<sub>テ</sub>立<sub>山</sub>号<sub>ハ</sub>と  
との<sub>レ</sub>こと<sub>ト</sub>寺<sub>号</sub>以<sub>テ</sub>改<sub>メ</sub>て<sub>一</sub>雪<sub>蹊</sub>寺<sub>ト</sub>号<sub>ス</sub>る<sub>ル</sub>寺<sub>ノ</sub>額  
ハ<sub>一</sub>迦<sub>彌</sub>三<sub>藏</sub>院<sub>信</sub>尹<sub>公</sub>の<sub>レ</sub>法<sub>華</sub>あり<sub>テ</sub>贊<sub>ハ</sub>城<sub>州</sub>南<sub>禪</sub>  
寺<sub>唯</sub>杏<sub>和</sub>尚<sub>ト</sub>請<sub>テ</sub>り<sub>テ</sub>也<sub>事</sub>也  
土<sub>州</sub>太<sub>守</sub>羽<sub>林</sub>次<sub>將</sub>正<sub>四</sub>位<sub>雪</sub>蹊<sub>恐</sub>三<sub>大</sub>禪  
定<sub>門</sub>慈<sub>容</sub>贊  
雪<sub>蹊</sub>大<sub>禪</sub>定<sub>門</sub>者<sub>一</sub>天<sub>姿</sub>秀<sub>狹</sub>明<sub>徳</sub>必<sub>隣</sub>階<sub>庭</sub>蘭<sub>玉</sub>  
和<sub>氣</sub>靄<sub>々</sub>一<sub>門</sub>桃<sub>李</sub>喜<sub>色</sub>津<sub>々</sub>其<sub>平</sub>日<sub>也</sub>匿<sub>笑</sub>慧  
遠<sub>汰</sub>師<sub>願</sub>往<sub>生</sub>於<sub>一</sub>西<sub>方</sub>蓮<sub>漏</sub>獨<sub>尅</sub>難<sub>々</sub>易<sub>々</sub>其<sub>多</sub>

雪蹊

李也追慕息畊老衲長兒孫於東海蘭舍高擎盤  
々固々可尚哉可惜哉孝子篤 慈容請贊於予  
不獲止謾訂愛君愛國智過又武勇名高率土濱  
天亦捧花獻遺像熱時梅菜十分春

今茲慶長四稔巳亥六月如意珠日

前任東福後任南禪惟杏叟永哲謹贊

抑此高福山慶雲寺弘法大師の開基あり当國  
よ七ヶ所辺路として大師の定め給ひし七ヶ所  
の寺の其一は四國順礼の札所ありし頃の  
是の高福寺と唱へ奉りしは長瀬の七福

寺として福の付く不伽藍七ヶ寺有り高福寺と其  
一之或説は實は高福山ありと云福寺有故は  
野人村老説て寺号は唱へ奉りしは高福  
寺四福寺中跡は高福寺の東より其余の四ヶ  
寺ハ跡地と知る人あり愛雲寺ハ雲慶徳慶西作  
の常師如来ゆ安ありは家故に寺号とす此寺本  
ハ真玄の流派ありしは月峯和尚の開山と  
て雪蹊怒三の菩提寺とせしは臨福派の禪宗  
とありしは是れをいふ所の地ありは四國邊  
路今も札を納て礼拝せられたる三郎信親の菩提

寺浦戸山の天甫寺は、この不吉高福山に移し、  
其屋等造営有ふ一として其後、此定め大工小  
工共聚て事始め有者、所より石田治部少輔及逆  
を企て盛親是と崇と一給ひ其科に依て此國に  
設<sup>没</sup>収せり、是の彼造営の所法とあり、あり、  
天甫寺の寺地、この不吉の寺と常陸居士の寺  
其屋の、この移さるる、其終有る、此程、  
て後、巡行の辺路、被り、宿り、たて、火、  
誤りて焼失を礎、斗、残りて、今、又、河、天甫寺、  
屋の五輪石、雪、蹊、寺の住持、取て、当寺の山、  
細

め、少、あ、と、と、あ、え、  
替、以、受、て、土、伏、守、と、改、め、四、位、侍、従、に、叙、爵、し、て、武  
運、永、く、家、門、の、繁、昌、と、し、見、え、

石田治部少輔過塞の事

爰、上、山、西、撰、津、守、の、去、り、朝鮮、在、陣、の、遺、恨、止、ま、  
り、り、り、や、寺、沢、志、戸、守、と、相、談、し、て、訴、状、を、志、し、  
め、加、藤、主、計、頭、黒、田、甲、斐、守、鍋、島、加、賀、守、毛利、壺、岐  
守、の、不、義、の、旨、執、り、五、丈、老、一、と、捧、書、り、不、丈、老、則  
按、見、者、り、是、の、加、藤、黒、田、鍋、島、毛利、の、一、方、一、是、の、  
寺、也、り、是、の、四、人、の、衆、中、諸、君、壺、通、の、區、等、を、認、り、

内務省

て新長、表裏に構て扱取結ひ私出りて  
是非優劣の分り、分明に證據ありて申披り  
り、是れ山西の事、石田治部少輔執一に  
及、此處の訴状を以て、石田の事、  
と、全計頭甲斐守深く憤り、津野左京大夫福島右  
衛門大夫細川越中守池田三左衛門加藤左馬助  
を、三月十三日治部少輔  
一使より申さる、家々共朝鮮の事、  
骨血を以て戦功の段、福原左馬助輝見和泉守徳谷

内務允三人の使として、帰朝せしむる  
早ぬ誠の擧群の働かき、他の知事所あるは、恩  
賞有るべき所、彼三取あ、悪者細と、彼三達  
と、急度切腹申付らる  
一、と申入る、治部少輔是、馬ひ、  
此義に、各領解、この働は、彼三人の申あ、悪  
者、あ、軍功、名、  
是、恩賞の儀、彼者共の所、  
是、七人の衆を、士の申、  
是、其、

治部



少輔其又其果以爲一として人数を集め其用意頗  
りあり其意は尋道ハ彼三成に切後也とせん  
岩よりあふと朝鮮在陣の時固碁の意趣は暗し  
人岩の今是又事はとて三成に詰後切せん  
岩之とくや斯る所は加賀大細言利家卿病悩頗  
りありて大名小岩西の丸を参向せしは治部少  
輔と日夜相詰て私宅に歸らざるは是ハ一押  
忍人事と流石ありいとて帰宅せし押寄詰後切  
らせんと遠見のり此由と附けあはせし時利  
家卿七箸既し尽て閏三月三日揃ツク給ふ春秋

方十二とと候之し斯る一ハ大名小岩一とてり  
合て登城の事治部少輔と出仕を例の七人居城  
して一所は集り密談の事是利家卿逝去し依て  
三成私宅へ歸りしきありハ今夜討果を一きと  
評議あり皇太子秀頼公の居陣本の番頭衆若治  
右衛門此より遠見して治部少輔と叫きりふハ此  
人ハ小声にて兎角今夜去る事と申さるハ思  
ひ当らる事ハあく考や日比波及びいふは事の  
あ致し知れずと事と申さるハ治部少輔心得偷  
りし備前中細言の備前島の宅一と系りたり是

内  
書  
目

を以て佐竹右京大夫義宣會津中納言景勝山西  
掾津守鈔長ホハ備前島一打寄さゆハ評評ハ  
らせとと軍術やあつるらん免角伏見ハ外き内  
府出頼ハ惣ふハハと治部少輔ハ女乗ヲ乗セ人  
々の跡ハつとて伏見ハ立退きハ程ハ人曾て  
志ハさりハ治部少輔ハ伏見奉九の次一段高  
き所ハ則治部少九とハ此屋簷ハ取籠りぬ  
治部少大坂ハ落ハと安志ハハハ七人の輩手  
延ハハハ家故ハハ取遊ハハハ何所迄ハ追  
詰ホと進とて人数ハ揃ハ伏見ハハハ押ハ寄ハ

内府此ハハ波給ハ是頗不天下大乱の基ハ宥ハ  
ヤとて奉多佐治守井伊兵部少を使とハハ七人  
の方ハ是ハハ秀頼公ハ幼穉と云利家遊去有  
て臣蒙忌の折とハハ臣膝奉よハハ様ハ家騷動  
振藉以の外ハハ事ハ治部少事奉ハ職を取揚  
區塞セセセハハ各堪悉有て静ハ進ハ此ハ  
ハハ同心ホキハハ公蒙ハ對ハ忠ハ  
ハ一ハ家康ハ治部少ハ器ハハハハハ仰ハ  
ハ五大老の隨一とハハ天下一大名と申請  
相談の棟梁ハハ力及ハハ今ハ身ハハハハ

とある事目の前あるはうく用き事し種く  
古ゆいり色此上の整居せも其を面目を不  
く外ありとて静るる其後中村式部少輔  
一氏酒井右兵衛佐忠世使とて佐部少右  
是の事見今大坂伏見騷動より事保居辺の一心  
より見上様告知の事より一と暫く佐和山へ  
信下り一兩年隠居考へ子息隼人の事ハ別未事  
別の数入て宣い々々申す一と仰せり見  
ハ佐部少番細美見是より返答申上り一と  
て西使の返り景勝美宣二家ホを呼て此事ハ

ふよと申されり色ハ何道と異縁匿ふことり  
号と先内府の仰又任せられ給ふ一と詮傍一  
決して人し々申されり色ハ仰の趣美見考問道  
日佐和山一被下り一と其隼人等宣い々事頼と  
申されり色ハ大臣殿を神妙も其公私の宿宜覺  
一考と仰せ事不其後中村式部少輔生駒雅楽  
頭一使の事とされ佐部少佐和山一下り色考問  
兩人居道り考へ家康と三河守美濃考と仰  
考され考断て三城岡三月十一日伏見出立り色  
ハ結城三河守殿に安藤帯刀出付て志見道り

内  
外  
上  
下

内  
外  
上  
下

〜て是ハ少少二人の中老と申連下と下りて  
家大津松幸也過膳所に至て三浦馬より下り礼  
謝して辭しられたる河守殿ハ是より歸り給ふ  
中老西人の佐和山よりとあるは是なり

景勝関東下向の事

是より程石田沼部少輔三成整居せし事  
の威おのつる衰一内府の威勢孫増し是ハ  
徳善院を以て印増田右衛門尉長盛長東大花大  
輔正家ハ評議し是ハ大名中又ハ黨ありとい  
ふ事少事ハ出来らんといふ事ハ所詮内府を

立て下知事請ふとて堀尾帯刀して申を色  
りふハ快見の法城明言事しりふハ大臣殿  
の法城ありは然るはき由申さるは是ハ内府  
評容有て閏三月十三日快見の城ハ移り給ふ去  
月十九日当城より向島ハ後移り程あり又法  
城ありは是ハ加藤黒田法城より七人の  
面ハ今度内府三成を扱ひ玉ふ事更ハ心得  
りハ是ハ内意ハ是ハありんと憤りたりと  
諸將別々各々下向して是ハ難説止む時  
ハ加賀宰相利長卿ハ是ハ大細言殿の法城ハ備

内  
務  
省

目録ひらるるの法くく世とて觀察の事と斯くハ  
天下終に静謐ありし所詮本國へ歸り事のやう  
ありうくもやと信暇申五月始め大坂に立て  
加洲へと下らば事候是は彼へ加藤主計頭長曾  
家部土佐守の事とて大名小名國々へ下り人々  
多う包みり申よと會津中細言景勝ハ九月半ハ  
信暇申奥州へと下らば事候石田三成佐和山  
子居りり事候此由は彼へ偷りて景勝の旅宿  
へ出向ひりりりの人出退きて小声と成て申け  
るハ今の世の野風ゆつゝ考ふと秀頼公終よ

ハ天下に内府に奪ひて給ひ考りん事疑ひありし  
惣して内府より大名小名各親しむと進付り思ふ  
ハ手紙くくくはとて世に取考一紙との方便  
り傳へば往昔の北條時政と異あり故左衛門  
執の世に治め天下とて一々安楽の境に居りし  
め給ふ大功を無とあり考りん事歎きてと猶何  
よりある内府の年俵編組と親しむ事進歩位高く  
とて之を食禄に飽満りて大名も上様の高貴も  
りふり此ハ此考りん事況小身下官の輩とありて  
や内府に靡き難ハと申ハ考りん事秀頼公の信

身の上は思ひ苦しい悲しいしりしり調あり三威  
事以下よと語存知のころく匹夫よと目取立よ  
頼も事録の列又入るもれは君恩海より深く山  
よりと高し一世の間何ぞの是は報し事あり  
きされは三威且夕時肝は確き事としりしと一  
力の及ぶ所又苦の是体て三威潜の二諸將の畧  
を諫る見事よ毛利君の内府は劣らぬ大名とい  
ひ祖父元成より武名高しとしりしと元來輝元  
卿將の畧は当り玉ふとい見事守家卿の聰明  
よ多しとしりしと若くあはしりし事思ひ此両

家ハ只人の敬ふ斗よと思ひ付深く後ハ一陸家  
と謙信より謙りゆ諸給ひ大名と申武名としり  
内府の牛角のやうに皆人思ひありと様一の  
日事公よ考へ一兼て申合せしころく此後には  
下向の時最到来よ後石と二偏に思し召立給ひ  
幸ありは上りあり世間のやうに法は覽考へし来  
年上望に能き事見斗りし上りよて事録終し  
しりしと時召考へ會津より關東へ法登向りし  
平均あり内府の領分悉く法領に定め考へ給  
一手さきめり此の考へし又上りよて事録終し

内  
務  
省

く考ふ此方より一左右次第と奥より且旗本と  
ら進考一然らば内府はさうめて下國せき世兼  
ての衆中と市一合せ跡は追て馳下り箱根にお  
りて旗本立考へり其時佐竹は旗一合され且出  
陣の目前後より押鞍に攻めあらしめて考へり  
は内府心いり考へり考へり考へり考へり考へり  
内府は亡かきと人の出死候と考へり人の目前  
ありより一思惟考へり一と詞考へり一と理考へり  
一と申考へり一と流石智謀勇氣の景勝と関東  
諸家有よせんと忽と懸心祭りて宣ひ事候は公

兼の庄考あふいり考へり考へり考へり考へり  
一と考へり一と事考へり考へり考へり考へり  
一と二の間の其時の宣ひ考へり考へり考へり  
の隠考へり考へり考へり考へり考へり考へり  
て別と考へり考へり考へり考へり考へり考へり  
宰相利長卿ハ奉國一を下り也江戸内大臣家康公  
ハ伏見の城ハ座考へり考へり考へり考へり考へり  
き國ハ異考へり考へり考へり考へり考へり考へり  
中老評一考へり考へり考へり考へり考へり考へり  
公の字ハ定考へり考へり考へり考へり考へり考へり

内  
考  
考

此備一事事終不爲うりて只に護の名を除き西  
の九子て守りて奉りて多しと然家一と衆像一決  
して此者申せしなりしの内府に許容あり奉  
新中老悦ひ像は善講の権一同年の冬結構は成  
就し内府預て移らせ給ひ事息の大坂の上下  
安堵して是を乞ふり多し斯りしは威勢い  
よく日頃の趣へ誘人重んじ奉り奉り太閤は在世  
の時と異ありて天の許に聖徳地の報せ奉り果  
報へと奉りて申し合ひ奉り石田治部少輔は佐  
和山に居て此よりゆきて孫傳忠止時あり昼夜

胸はとらうりて

此抄家傳の事

彼會津中細言景勝と申は久皇五十代桓武天皇  
の末高望王の末葉大庭次郎景弘は後胤あり  
景弘の甥大庭三郎景親頼朝は謀及して一族を  
亡し不孝也又八家源して三代將軍の後北條九  
代は過ぎ足利將軍尊氏卿の治世に及て關東の  
後領基氏の後見と杉家の寛臣出尾左衛門入道  
賢昌智常備備の上杉家の執権と本是より出尾  
の子孫威は震ふ事甚しく終は越後國に押領を

内  
外



関東の管領の武威漸く衰へし於憲政の時  
至て北條氏綱氏康軍を築いて武蔵上野を攻取  
り如憲政安の事と思ひ天文十五年四月廿日武  
州川越に於て氏康と合戦をとりしと憲政終  
り討負越後國へ落し去尾景虎を頼ると於若  
字と関東管領職を譲り北條退治の計策を志し  
給ふ景虎領掌して武蔵上野を登向し日夜合戦  
止む時あく父を討て子に失ひ仇を返し恨を報  
せんと互に駒を奪ひ接ししの不慮に扱ひ取  
結ひ終り我軍のあし北條氏政の次男を景虎養

子として政虎としてあの子を其後景虎武田  
信玄と信州と幸ひ川中島のあつて合戦に敵五  
千余騎討捕軍功の誉見せし高し永禄年中景虎  
大谷如幸として治して公乎義輝公を拜謁し義輝  
の字を給はし義輝は輝虎と改む殊更関東の管領  
として細代の樂は免所を剃髪出家して謙信  
とて申す其北武田四郎勝頼北條氏政の娘を  
娶て縁結す去り程は武田北條と於て三家鼎の  
二とく和結ひ関八州数年の争奪一時止て  
万民方平と唱へり然るに上杉入道謙信い

内  
外

ふあふ所爲よの者ん北條政虎が養子とて  
居城春日山の二の丸に至りては智の嘉平次景  
勝ゆも又猶子とて三の丸とて住世嘉平次景  
は闘諍が後世と孫とありて此之心所爲人の福  
にいつり案のつとく天正六年三月十三日諱信  
卒去せりては景勝春日山の本城より付け  
うり二の郭を目の下と見下し鎧砲ゆ終ちりけ  
りとの政虎驚死大場口一走と出相戦ふとりて  
多と叶ひも政虎一戦と討負甲州へ逃ゆ武田  
勝頼は頼と暫く安座せりて所と景勝去故長

閑跡部大炊分と賄賂とを較べりては勝頼郵欲  
と耽り録家の道ゆ高きと政虎ゆ殺害と扱ふと  
景勝越後国ゆ領と中細言と鍾とと大老と列  
移りて百萬石ゆ領と中細言と鍾とと大老と列  
し多ありの之成と遊うとて関八州ゆ領とんと一  
時の欲とひりもは天下の大事ゆ企給ふ家運  
の程と危あらし

加賀陣屋の事  
石田治部少輔三成の明暮内府に亡はゆき思按  
工交の外に又他事あり斬り斬りと加賀宰相利

長卿ハ去年より位國ニ下りて此ノ例あり  
 忠心地あり色ハ療養ノ案ニ月日越て在國セ  
 ら不活部少輔是地時ニ究竟ノ事ハ世河也謀及  
 ノ企所也と稱し内府をすくめて討手ニ下り至  
 爾テ納諾ノ輩と稱し合セ勢ハ強し合戦ノ最中  
 一跡より責下り景勝義宣ハ出羽奥州ノ勢ハ率  
 一打て出前後より押波と討取ありと案し  
 是向ハ大政一人也也ハ一老中事外一申をセハ  
 是ハ三休警居セし動とりつと聊も公義ノ臣  
 為忘事と若政整ノ繁多ニ給て思ひ忘也

給小事と若々告知セ過矣此補ハ事外んと存  
 是外ハ地事あり然道ハ宰相利長卿去年加州  
 下向あり今ニ在國ニ後惣して大老在國ハ百  
 日限りあり一北故左衛門卿意也如大老ノ身  
 一之ハ費去幾もあはぬハは控出皆られ若々  
 難ハ正法守身也一き但実者惟ハありと若一  
 一と謀及ノ企所也一告知セるありのハ若急  
 一人下され法紀明あり一と申す也ハハ  
 老中事外實ニ当用政事ノ思ハ高也若々急  
 加州一人也也ハ一在國ニ定ハ日數ニ過者急也

余勤勞之<sup>一</sup>申出<sup>ハ</sup>之<sup>レ</sup>利長聊痛ハ  
為事考<sup>テ</sup>考勤遲滞<sup>ニ</sup>及<sup>ヒ</sup>今暫<sup>ク</sup>療養セ<sup>シ</sup>急  
快<sup>キ</sup>疾<sup>ニ</sup>考<sup>テ</sup>早速余勤致<sup>ス</sup>之<sup>レ</sup>宣<sup>ハ</sup>事  
不使歸<sup>レ</sup>此由<sup>ハ</sup>申<sup>出</sup>之<sup>レ</sup>扱<sup>ハ</sup>謀<sup>反</sup>疑<sup>ハ</sup>而<sup>シ</sup>  
討手<sup>ハ</sup>小<sup>ハ</sup>誼<sup>ハ</sup>宣<sup>ハ</sup>之<sup>レ</sup>評<sup>源</sup>以<sup>テ</sup>事<sup>ヲ</sup>  
ハ<sup>三</sup>成<sup>ハ</sup>同意<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup>誼<sup>ハ</sup>申<sup>出</sup>之<sup>レ</sup>考<sup>ハ</sup>加  
州<sup>ハ</sup>大敵<sup>也</sup>也<sup>ハ</sup>大臣<sup>殿</sup>下<sup>ニ</sup>考<sup>ハ</sup>之<sup>レ</sup>申<sup>出</sup>  
也<sup>ハ</sup>考<sup>ハ</sup>内府<sup>辭</sup>之<sup>レ</sup>事<sup>ハ</sup>考<sup>ハ</sup>之<sup>レ</sup>評  
諸<sup>ハ</sup>之<sup>レ</sup>出陣<sup>ハ</sup>用意<sup>志</sup>也<sup>ハ</sup>考<sup>ハ</sup>之<sup>レ</sup>加賀<sup>ハ</sup>  
之<sup>レ</sup>宰相<sup>大</sup>之<sup>レ</sup>驚<sup>ハ</sup>之<sup>レ</sup>此<sup>ハ</sup>陳<sup>謝</sup>也<sup>ハ</sup>

と叶<sup>ハ</sup>之<sup>レ</sup>運<sup>ハ</sup>之<sup>レ</sup>籠<sup>城</sup>也<sup>ハ</sup>宣<sup>ハ</sup>之<sup>レ</sup>  
家臣<sup>考</sup>美<sup>也</sup>之<sup>レ</sup>素<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup>之<sup>レ</sup>覺<sup>悟</sup>也<sup>ハ</sup>考<sup>ハ</sup>之<sup>レ</sup>籠<sup>城</sup>  
考<sup>ハ</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>  
白<sup>地</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>  
也<sup>ハ</sup>人<sup>質</sup>之<sup>レ</sup>出<sup>之</sup>也<sup>ハ</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>  
考<sup>ハ</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>  
ハ<sup>後</sup>日<sup>ノ</sup>批<sup>判</sup>面<sup>自</sup>考<sup>ハ</sup>之<sup>レ</sup>又<sup>ハ</sup>母<sup>堂</sup>也<sup>ハ</sup>考<sup>ハ</sup>之<sup>レ</sup>  
考<sup>ハ</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>  
常<sup>ニ</sup>也<sup>ハ</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>  
と申<sup>出</sup>身<sup>仁</sup>心<sup>深</sup>也<sup>ハ</sup>人<sup>ノ</sup>也<sup>ハ</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>

人質の事と考へしと申  
事進ハ皆此意ニ同シテ類テ臣母儀ハ江戸一参  
ラセ儘ニあり通リ給ハ大臣及侍ノ召  
素リナシ多ク一トト察シ考ヒツモ臣心易ク  
一トシテ療養由断あく遂ニ是レ性情給ハ時  
早ク臣ト有為ト申送ラセ考ヘテ内  
府和義ありトハ加賀陣ノ他侍ハ止マレ  
石田ニ成此由ハ傳テ加州陣ノ方便ト事あり  
是ハ居あり内府ハ討テ事叶ハレ今ハ奥  
州ノ事ハ起ラセ内府ト下ニ隔テ相談有レ

と會津一人と下ニ給東ノ邊ハ

内府關東一進進祭ノ事

去程ハ會津中細言景勝ハ急キ東國又立歸リ家  
臣共ハ召集ハ石田沼部也ハ内儀ハ市ノ都ノ左  
右ハ待所ハ云云人ト下ニ給東ノ相家ハ告シ  
ハ今ハ一ノと采地ハ多ク國中ハ新ニ城ハ築  
キ岩ハ構ハ兵糧ハ取リ入ル人数ハ集メ郷民ハ一  
揆ハ多クハ遊辺ハ進補セテ合戦ノ支分志  
此ハ高シハ諸方ノ輕進給ハ止時あり大坂  
ハハハハ大事ノ程出来ハ此世ノ中進ニ給

奇

ありと思ひしに今世に乱事出来りれども又  
進軍の多きといふ事も患ふ所らん其多んと危  
きを察しあうる内府急に詔討者ありと  
て大手搦手の手分海老の國へ一と觸れし事  
大手白門口の家康公秀忠公山道へ一佐竹吉宗  
大夫義宣結城忠次郎伊達信実の伊達隆奥守  
政宗米沢の山形出羽守義光南部大膳大支信  
直秋田藤吉郎実季具外羽州衆徒少く津門口  
北國の大將加賀宰相利吉先手堀久左郎秀  
治村上周防守義昭溝口伯耆守信勝と定めて不

七月廿二日大手搦手一同に乱入す此後一誌  
將一相觸らざるに内府は去月十六日大坂城に  
進發伏見に居着座す一日信濃湯林見の信城  
より島居彦左衛門内藤孫次郎衛門松平主殿助  
松平五左衛門市川美室連同十八日信立河原具  
夜石部と信泊に有る如く長束大祐大輔同子  
息孫部少輔兼白一七明日水口にて餐應仕立上  
申されし事内府信長悦びて必は信立寄赤  
き事一記し信納諾りて大坂一國光の刀部部  
一松平の刀部給て返さるる事ありの事信遠

意。有者人其夜の成。刻像。石部。立。給。小  
時。海。邊。半。宿。名。七。斑。日。水。口。至。申。冷。死。  
氣。色。不。快。子。依。夜。中。像。二。羅。立。其。歸。陣。の。難。立。寄  
悦。緒。分。速。考。一。一。七。仰。高。也。立。給。小。色。少。所  
く。錦。倉。迄。強。く。以。口。巡。見。有。て。七月。二。日。申。の。刻。白  
戸。一。着。高。考。一。一。七。去。多。程。二。内。府。の。迹。跡。以。志  
く。以。関。東。一。馳。下。子。人。く。一。福。島。右。衛。門。大。丈。正  
則。子。息。刑。部。大。丈。正。之。舍。弟。掃。部。頭。西。頼。地。田。三。左  
衛。門。尉。輝。政。子。息。武。藏。守。利。隆。舍。弟。備。中。守。長。吉。同  
吉。左。衛。門。尉。織。田。源。五。入。道。右。兵。衛。子。息。河。内。守。長。孝

細。川。越。中。守。忠。興。黑。田。甲。斐。守。出。政。京。極。修。理。亮。高  
知。羽。柴。共。市。郎。忠。隆。博。野。左。京。大。丈。幸。出。堀。尾。帶。刀  
先。生。吉。晴。子。息。信。濃。守。忠。氏。孫。堂。伏。波。守。高。虎。播。磨。子  
宮。内。少。輔。高。吉。田。中。兵。部。大。輔。忠。政。子。息。式。部。少。輔  
長。頭。加。藤。左。馬。助。嘉。明。山。内。對。馬。守。一。豊。生。駒。讚。岐  
守。一。政。蜂。須。賀。長。門。守。至。鎮。羽。柴。伊。賀。守。定。次。有。馬  
刑。部。卿。法。印。子。息。玄。蕃。頭。豊。氏。中。村。彦。右。衛。門。尉。一  
榮。富。田。信。濃。守。知。信。寺。沢。志。广。守。廣。孝。稻。葉。花。人。既  
通。茂。九。鬼。長。門。守。守。隆。吉。田。兵。部。少。輔。重。勝。同。姓。織  
部。正。信。勝。全。森。兵。部。卿。法。印。素。玄。子。息。出。雲。守。可。重

一柳監物盛末山出遠仁守吉辰桑山伊賀守貞晴  
子息左衛門佐一貞同姓相摸守西尾豐後守  
光孝德永民部卿佐印壽昌子息左馬助昌重分部  
左京亮政寄石川玄蕃頭康長幸多因幡守正武松  
倉豐後守重政龜井武藏守政直山名宗入道禪  
高天野周防守景俊山岡道阿孫同姓主計頭景以  
佐久間河内守政真石川伊豆守貞政律田長門守  
信成舍弟小平次信明平野遠江守長泰舍弟九左  
衛門尉兵元銘木越中守童禿佐藤三河守信之佐  
久間久左衛門安政舍弟源六晴之池田備前守知

政子息孫右衛門尉水野河内守清忠佐々淡路守  
外政堀田若狭守重氏丹羽勘助氏以浮田左京亮  
貞盛戶川肥後守達安福富平左衛門真貞兼松又  
四郎正吉山岡修理亮兼松別所孫次郎治直三好  
新吉衛門慶清山城守内少輔季宗秋山左近光匡  
赤井五郎作三好一任入道爲三同越後守可正舟  
越五郎右衛門永景岡田庄五郎喜長板原四郎左  
衛門庄田小右丈同小右衛門多羅尾久八持越兵  
庫頭仙石式部少輔猪子宮内少輔東條紀伊守俊  
旦筑後守山中三河守伊丹兵庫頭佐々喜三郎神



保長三郎大島茂兵衛加藤平内河村助左衛門大  
島雲八郎林丹後守村越三十一郎伏屋新助野尾喜  
左郎石尾七兵衛能瀬惣左衛門森宗兵衛柘植平  
右衛門中村又左衛門孫右衛門山口左平右甲斐左  
喜右衛門長崎半左衛門清水小八郎溝口源左郎  
赤井右兵衛堀田權八郎落合新八奥田次右衛門  
長谷川甚兵衛田中清右郎箸尾半左衛門松並半  
右衛門野間久右衛門奥平藤兵衛中川半左衛門  
沼袋右衛門施茶院都合軍勢五萬五千八百余人と  
と波乞

越後國一揆の事

去下と又會津中納言景勝ハ先逃國出打隨一人  
と評美ハ越後國ハ旧領ありハ彼國の任人丸  
田齋藤掃崎ありハ溢り此は招きと一揆  
此と進の事ハ彼等素の望む所ありハ得る賢  
ハと勇之進之同意のハ此是儘ハ在る所々ハ  
乱入して田畑あり民家ハ燒き此は強盜ハ  
ハ事ハ程々國中ハ騷動ハ小斗あり其は越後國  
ハ堀久左郎秀治願して春日山ハ在城ハ三条ハ  
城ハ城雖も直清坂戸ハ城ハ同舎弟丹後守直

寄村上の城ハ村上周防守美那柴田の城ハ溝口  
伯耆守宣勝出陣の城ハ堀美濃守頼直下倉の城  
ハ小倉主膳光清榎尾の城ハ神子田ハ古御門政  
友皆其要害也守り者不忠黨の叔原國中ノ悖  
異もとて攻て各安らふ思ふ所又一揆共相集雲  
霞の王く奥州越後の境下倉の城ハ押寄民家又  
火油の多鳴き叫て攻怒不素り城ハ無勢高きハ  
坂戸の城ハ急き告て加勢出乞小堀丹後守是也  
彼て油断をく此ハ河をたてて頻てお立其道九  
里余も急く知又下倉ハ一揆原息也と絶て

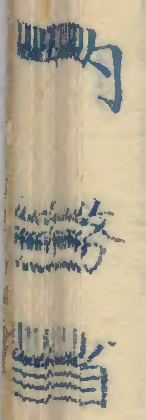
押し立てて攻り思ハ主膳ハ何れも七ノ門は開て  
おて出火油高きして相戦ハ主従五十余人枕也  
あつて討死も一揆共お勝る之悦ハ所ハ丹後  
守岡中佐て菟入組横を断又お破り三百余人討  
取陣も叔原追おし城ハ入て之れとて城主  
討死ハ多思ハ敵手の者此に入る事多し思ふも  
一揆とも引退き四日所ハ隔て陣取事お丹  
後守是也見て速見織部山中数馬先手とて  
押怒追崩し首二百余討取り一揆猶も諸方  
蜂起して三条の城は打圍之堀柵は引破り無法

金騎ヲ押入るは城中より出でて出資は皆捨て路  
きりの溝口伯耆守是は攻て捨至一はは河分  
りて村上周防守又藤一合せ其勢七百余人搦  
拵して急記きり道に郷民とて此彼より荒  
出く支人と多るは打捨難捨文龍川は越へ五  
泉に至る所は一揆とて堀柵芝土手池つは二三  
百人鉄砲は構へ待掛く是村上溝口是は見てと  
のく一也と一文字は打破りぬ京百五十人討取  
急き釣く所又一揆とて橋本又要害は構へと  
る爰河と難あく追ひ扱ひ三条の此方より尋ぬ

是ハ一揆系稲麻の志とて打圍に對陣を以て申  
し多る其日の既又暮りてハ三条山の埒に陣取  
りて城中へ後詰は志せしと嶺に大崩は焚  
りせられハ一揆とて是は見て後卷河とて也  
りハ多る執て責口は解て何地とてあく引退き  
事

石田大谷軍談の事

其比大谷刑部少輔吉繼ハ越前ノ敷賀ニ在城シ  
り多る家康公會津退治として下向のありし  
時ハ往く思ひ事多ハ諸國ノ諸士故左衛門の



代より年来軍に結果以日暫く静謐に歸して諸  
人些し安堵を蒙り又大乱出来て天下の爲  
然ふ一りゆき幸家康公景勝卿皆家に懇志あり  
ハ急き関東へ下り両方以宥め和義を調へてや  
とて嫡子大學其弟山城公伴ひてと出立幸家刑  
部ハ去年慶長四年の暮より不慮に病悩を得て  
兩眼盲く見えず一も一もハ甥の大學公養子より  
て其弟山城公伴等兩人以手引として公義を勤事  
不問此爲も又兩人以伴ひり多しを以て石田  
三成此由以告て刑部公伴ハ使以て之を関東へ

信下りのとく兼て其を以て申談し交事あり  
是ハ立憲給へて云道に幸家刑部公伴ハ和談の  
事あり何ゆると起て佐和山へ立赴へ事れハ治  
部少對面してすゆくと餐食り互に物語し  
て治部少被申りるハ内府と黃門和義を調へら  
せんとハ居所存のと一は傳へ其其縁はあり  
ハ居下向ハ必居無用之其故ハ景勝の籠城ハ三  
浦と内意由示し公セ家康公亡き一き方便に  
其意趣ハ家康近年の驕奢ありしの張高ハ麻公  
馬と稱して己ハ威勢を顯りて世に乱るハ例

内  
務  
省

聊と違ひぬはと弓矢は用ひて天下は奪ひ  
んとのたると疑ひあり今や兩葉は代らる人  
符柄は用ひの患ひ目筋より是より依て景勝秀  
家義宣幸以中心は合せ内府はよくめて下國せ  
を七路より家く攻下り景勝と兩方より押つ  
てお捕相争ふ事と難ひ然て申さる事れ刑部  
是より此大事は何とて吉徳は今迄無きと給  
ひ告いぬとと申さる事れ刑部は邊の事  
常く一家一味の事より一の難く相談を多  
とあり何の程の事と對面の時申しとと  
とあり

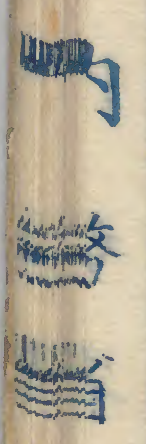
一考ひは是と申さる事れ刑部をさると考  
備内府は討ふべき方便ありの事刑部は先西國  
毛利一族島津長曾家部山西亦其外小身の輩  
ハ誰く近日大阪へ馳集りて東國ハ伏竹多賀  
相馬秋田真田は始め小身の面く彼是皆自國  
より居て相争ひの左右は待て手合を系結束之内府  
奥州より入て景勝と軍は取結ふ時茲は伺ひ上り  
より押下り箱根より旗を立てて相争ひて三子よ  
り内府はさし獲り討取手筈より考之天晴内府天  
をうらり地をくらんハ志より只一戦の中より

内府  
文  
書

月日辺三成齡漸く傾き若一ハ右関一奉公と是  
迄と存ふ之此後誰有て斯う大業也思ひ立若一  
き故左関の志事存一由一あんあう悲一々々  
と泪をあら一してと申せ思事左刑部少輔法一  
波て申せ思事ハ仰の志とく故左下の志事存  
一由一若一ハあんあう悲一々々身余を軍  
門下晒一若故後代に留めん事武士の望む所  
をせられハ余也捨ふを悲一々々ハ若一若一と  
一若故思ひ立故左関是若一とあ一若一若一  
若天下也矣ハ若ハん事歎きてと猶余の若一と



りハと敢て涙也と流一若故左刑部少輔若一果と  
思ひととしの若事若々や心得若一と申せ  
若一若一ハ刑部少申せ思事ハ若ハ左関ハ若下の若  
若習よて若軍法也見習ハ波得ら若天下の目明  
と若若若若身一して是程の事也知也給ハ思  
偏ハ若頼公の志運の末と存一若一若一若一若一  
の今仰せら若一若一若一若一若一若一若一若一  
ら若若若一ハ下手の若若若若若若若若若若  
時ハ敵や若若若若若若若若若若若若若若若  
若若若若若若若若若若若若若若若若若若若  
若若若若若若若若若若若若若若若若若若若



て引替へお怒ふ時ハ家忽と負ふある言其こと  
くは辺らつりか斗つて敵斯のありくせん斗  
る終少くと敵其ふとくを成時ハつりく終  
少や敵又固く替地を留ハ良將の道よりて  
辺者地等のよくそ多所より少も聖賢の評論ハ  
あふも今愚眼ハ見あ家康ハ智仁勇の三徳を  
兼ふ人ありと存る多之轉く至謀ハハ後海より  
そ是一むりも今と富と貴ハハ人数ハ貧をハ  
人ありよめゆふとあ事世の常之家康既又内大  
臣ハ臣一五大老の上座あると世等つて崇め

れとつりありはあハは辺と事終の一二して人怒  
も敵ふとつりもと内府と並つりありゆふも  
や今職成をゆけて區塞の法身之詔人の崇め志  
より麻き多ゆき是二ツ当時天下の大名家  
や輝元と教々国領もゆふとつりもと内府ハ愛  
領の國ハ州其外大名家数多領して天下ハ並ハ  
き大名あると人重んじ多之さむ人の思ハ入  
内府ハゆゆ是三ツ大敵強敵ハ達テ始終あり  
ゆゆも武勇の人の詔とや島津義弘朝鮮は下  
大敵を討取古今名譽ハ高名ありとつりもと一

且の勇よして武將のうととて系所は非を大  
軍に固まりて備は討死を思ひ定めての上は窮死  
及び猶も嗟とりの事とて島津謙の古勇あり  
去天正年中左衛九州に登向の時島津五十日  
と極一て強き軍ありと志する人よの大敵を逢て  
始終の強きとりの事とて日数僅の程は訴諸申  
降系しとて上は武勇全しとて申し難し内海は  
三別は有て甲斐信濃は敵は諸多年の弓矢は弱  
之は見せと味方の原の合戦は武田信玄天下は  
志あり最初の軍に臨て既は家康討負うるとい

一と居城濱松一の手と付させ是等要武勇  
と申さんよ是強敵を逢ておとせ出るとは事証  
據あり又秀吉公信雄卿と鐸指の時秀吉公十二  
萬の大軍は家康僅に一萬五千にてお向ひ數月  
對陣して守り居制へ去久手の原とては數万  
の大勢は切崩し終は秀吉公信雄卿和議は調へ  
せは是は是大敵を逢ておとせ出るとは事証  
島津の引口の軍一旦の勇よしては似るくとは  
以所謂大勇とてしよ一は是四の長先信吉公諸家  
の武勇の故一あり士の姓名は肩記し其の

内  
秀  
吉



平生の言語所録は見及ひ傳へ給ひ觀察有て  
姓名の字一と点出うけて此者の後來益々勇士  
とありんと又点出うけらるるを以て此者の今勇  
りありぬりたりとて後日却て不覺知らるる  
ん又是の害は逢ふ處と仰せられし一人と  
違ふも名将の後來は見給ふ事眼前のこころ其  
奇特申と思ふも其斯ふ其身の横死は志ありし  
まぬ事誠と死生余の事と悲しめてと猶余の如  
く家康其比のいふこと一國を領せしむる  
點の士十九人の名は井伊本多柳原酒井大久保平

石大須賀鳥井本是之ありし身の時猶斯の如  
と一況や今大名は備て去や究竟のりの歳と  
の考らん孫子と吾衆何ぞ強きと是一と考は  
内府は勝りて此是其五の九人の世と有て富  
業は致ふに皆子孫をありし故に然るに内府  
諸士の死後ゆりゆり始内は搜してと相違ふ  
く相違せしむるは是貴族父母の思ひ給ふを所  
ありし人の尊と志とありし身支度と因りゆるを  
是六の彼とりひ是とりひ軍の勝敗眼前の事  
悲しむ我故古関の大功を益々愛し多くの人

を死地とありし入道の人事勤死とと稱す所あり  
者と流をあらし申せしは是れ治部少輔の御  
せらるるに皆内府と三威と被引らるるに其  
あり兼て事外中申合せし操の上意として諸國  
へ事書ゆつゝのし天下の勢を以て攻んじ内府  
の對しは治部少輔況や関東へ下向の面々の  
入質大坂より是れ取て城中より出たるに心を  
心は憂して味方より屬せん事疑ひありと申せ  
是より是の刑部眉を擧て申すははハ最前より  
評と不所皆味方の勝利よりありとありと時

の運より其方便に依て主は憂して客とあり客  
は憂して主とあり事と考へし今御せらるるに  
事と終てハ石義の第一味方敗績の根幹之天地  
萬物誠よりありとされしはははを鑑み以てあり此の  
亦の枝ゆきと水は起りて花は咲くも是れこと  
一日ありはしと萎む信以てあり此の木の根  
は深うしとありし同し枝葉之花咲くとの公平日  
無常より小事も誠よりありしはははを況や兵  
の國の大事死生の地存亡のありし所よりありて  
ゆや東西とありしはははに給はぬ如言はぬより人

内  
各  
省



の勢を以て遠間のあく追討させんと被せしむる小  
勢いりて伊勢尾張迄や已過し其處に是下大分  
の兵を持たしむる手に入らば敵は空しく酒止し  
給ひしあしきうしてりは諸部少手は打ては且  
仰せらるゝとて思ひ当ふ事の考もや内府石  
部より泊り一日長束父子旅宿より引て明細水口へ  
立寄り給へ餐食し給へ初と申事也ハ内府考向  
を一一と堅く約束して親子より引出物由り長束  
は返りて頃て暮夜より宵より石部は立て馳下り  
翌日水口へ使者より歸陣の報立寄り考一一と云

送日ぬ長束ハ日くろ懇切めて其時と堅き約束  
ありあうは何故と立寄り考り不審し  
考ひしは叔父佐和山より夜の討討器也て  
考りハ立下りて誠又能き島に放し給へ  
ハ哉と色は衰し給へ申事也考系刑部連と叶ハ  
其処ハ思ハぬと合戦ハ折角首は御門ハ掛  
らしん時の思ハ出よ一ツの手くは所を  
き事ハありてあはすはも天理之考多し事ハ  
あきんしと止ハ大書之人考知居るハ其ハ  
ハ第一あはし心の及ハ所知居るハ叶ハ其時

内  
考  
考

「其天余の歸を所と悟て妄念の晴も  
居り是其言便とりの先益二の味方として常  
功の者出擲て秀頼公の信使として東征の  
こと思ひ召とて時後やうのゆきを是として給  
へ幼君の信使と心得出合ふ時進付寄てす一連  
へよと堅く云合めて是の給へ但し右部は留  
り忠程の内府ありハ病と稱して出合ハぬハ必  
定之さ思と天運は依て對面を為事考一は是只  
一句の遺云ありきハ出替の時偶ハ尺給き  
一申さんと有るとの事ハ云居しハ刑部ハ裁

第一歸りて事

関東一兩使の事

忠家程ハ沼部少輔三成ハ信くハ物ハ常以て  
吉健ハ金云一ハ具理備はぬといハハ前記事  
も企ふりの裁と後悔を思と今更ハ後そ一ハ事  
あふぬハ天運は任せんと関東一使の若給と急  
らハ事ハ愛ハ加賀井孫ハ郎重望して血氣強膏  
ハ士ハ三成彼給呼て申さ思事ハ今ハ家康  
関東下向ハハやうハの次第ハハ既ハ討手と  
ハハ向ハハ内議ありきハ付ハハ上使と

内  
文  
書

一被差下之しのみとて内府に近付廻てを  
 一連一申さる上大軍出動の事て天下静謐の幸  
 ありと大忠此上有るうの事仕裸也と申さる  
 子息連一関東にて大國に申し出候一と申さ  
 是事也ハ加賀井首の地より謹て君の信密命に  
 捨考ハ人事難少所の幸之殊更愚息ハ大國に申  
 出候給少候と兼ふ上ハ何ハ命に惜ハと申  
 一此唯今存し合せ考ハ右院の臣取見ハ村正  
 の古腕差の刀に拜領仕候是を内府に代々所  
 前々々禁作よて考ハ一重望手ハ拜領仕候事と

様の中は天の旨一申さる人是にて内府と考  
 一連一候ハ人事極の内之信心密人申さる  
 と申考不仕部少大さ悦ハ又本村弥市右衛  
 門とて其先奥州葛西大崎六十万石に領一候  
 勢守と申せ一の科に依て所領没収せらる  
 ハ又幸の各諸市右衛門に候て忍ハ居り考  
 を呼出してのやうハ内務之しのみとて家  
 康討取給一考と有ハ申候ハ子息ハ旧領  
 相連あハ申候一候一と申考是れハ諸市右  
 衛門謹て領掌を断て両使急き関東へ下りて上

使の若申入り内府所寄ありとて人して礼謝  
餐意ありれし西使せんうとあり空返歸り  
とり書も本村の急死ありきと加賀井の保  
く此事は幸意あり思ひしありして今一内  
府より通付んと案しつるひ道ゆと急うとと  
旭又濱松の端主堀尾帯刀先生今夏越前國府に  
拜領して入部のより罷越又城下より外達し  
加賀井申けふの由入部の由諱し目出な重望  
事止使として関東一罷下り只今海系致し  
天下の是大事此致しあり内府の旨語を申し

則又罷下り内府の旨先より一事公申致し去  
ありし重望の内府より由緒ありあり推察し  
ありし間下り較し事りあり家老の旨方  
能搦し肩筒を是とされ給えありと申し内府  
刀垂細義は得て其儀ありあり水野和泉守ハ  
内府の伯父の事あり是は信頼の惣ありあり  
幸ひ池鯉鮒の旅宿より出合暇語申答ありあり  
さうせ給へ引合せ仰の趣を頼に申しあり吉  
晴ハ越前一罷下りあり信田重て江下向の時  
ハ濱松に在合ハあり泉州ハ刈谷に居らあり

ハ其時彼肩筒取て下りて申されけり  
ハ加賀井悦ひ糸一とて別件ひて池鯉鮒至り  
水野和泉守對面して委細意趣頼りり  
斯て餐後過て夜は入り互は數盡成傾け分と  
志ふ如縁人はあまくと酒のいとくと左ハお  
きて酬ふ及ひ一地帯刀手水の宿は様の辺りと  
立出て座敷は竹亭左門とて十三とあふ水性  
壹人居るとあふ加賀井のあふ所存あや有  
ふん又乱心狂氣やふん坐立と見ふ委  
小照美の刀は授て和泉守は袈裟袴けと切つけ

和泉守

ふと帶刀ハと斗云て障子ハあハと倒き掛りて  
矢はまま先生ハ思ひとふと手水はつらハ何  
心あく坐敷ハ入雲と加賀井飛り先生ハ小  
鬢成些一切らと帯れハ先生ハ心得らと一尺三  
寸幅廣菖蒲作の刀は授て請ふとハと一くとハ  
と入座敷の隅ハ押付胸中を突通してらとらふ  
此家内の者らと驚起騒き立来り帶刀は狼藉と  
の隨をしと後らと切付ふ帶刀ハ返り喧嘩ハ  
和泉と孫八郎之とあめまらと耳と更と吹い  
ととと下と返しと帯刀數々所手負者也

和泉守



ハ顔て具所跡亦破リ蠟燭は踊滑一丈庭一飛出  
く至りまこの供の者共ハ座敷の意趣ハ志を  
道ハ何事あやと立騒ぎ手くこ刀は拵持て馳集  
れハ何事あやと居りれとも門はさしこ入道せ  
道ハ只晚ニ合て居りまこ堀尾の郎等奈良  
伊織兩家の裏は廻りつと来り先生は見て執て  
立寄り手は取出刀持り力士森岡右衛門を招  
て肩と懸せせて立出河島自の家は戸はまつし  
てのせま道ハ家は新谷一つ道て釣けと申す也  
り家を新谷言ハ此方にて考と瀨松一と泊り考

ふ先生十七才所手は負りれとと皆急所又あふ  
さりし。ハ日経て平愈しり

土佐物語卷第二十四

目録

盛親逆徒と崇と系事

市川石見関所出通事

細川越中守内室自害の事

伏見の城合戦の事

田邊の城軍の事

上弓人数賦の事

福来の城責の事

秋葉の御書

山崎の御書

田原の御書

林原の御書

磯谷の御書

大田原の御書

豊後守の御書

二十一日

土佐物語卷第二十四

盛親逆徒と與る事

石田治部少輔三成急死大阪と上り備前島守喜

多中納言の言ふ事と毛利中納言増田吉徳門尉

長束大將太輔安國寺等召招き寄對面して家康

關東下向之事並て示し合せし事と謀り禰と左

と天晴佐竹會津真田ホ三方に敵討受ていひ

ある家康ありと頼り給ひし事と思ひ

しし其内此方の軍勢は確し關東一押下り合

戦の最中より前後より引包み討取らん事案の内

内  
卷  
第  
二  
十  
四

あはれと手を取るやうに申さるるは満坐を  
りて入悦ひ合はせりて軍勢は健俊せよと  
て秀頼公の命として江戸内大臣家康退治せ  
るべきの条不日と馳参りて長来大為太  
輔正家増田右衛門尉長盛石田治部少輔三浦連  
判の奉書を諸國へと下せしむる去程に五畿内  
中国西國の大各小各馳上り百七十八人一味同  
心の連判出たりて秀頼公中より出雲守部士佐  
守盛親逆徒と畏せしめし御一歩も歩み不運あり  
其北盛親は在國して居たりて變に彼奉書到来

しられし土佐守家茂の面々御集め披露有て申  
されり家は此奉書いよこし何とぞ思ふ盛親は  
曾て信用せし其故は秀頼公今事僅くハ歳ハ成  
り給ふ所の毎一有て内府出立不也と仰られ  
御深察ははし奉書中秘の宿意は遂に秀頼公  
の命と稱はる可疑ひありし所也として又捨  
身死す所の事何とぞ申さるべきと名の異見を  
問ふ中、しき大事の評議ありし暫く他は譲  
り人又愚案もや落せり人関口は御筆多き  
中、右御門尉殿は烏帽子親にて得、其恩棄

らふ海より此法合カキ一と云ふも所見或ハ  
家康公ハ此当家ト多年因テ深ク今猶篤厚ハ  
臣志又考一ハ彼高子一崇之ー給ハ事奉意又考  
ト異議匿クよ一ト一定あふを多ク多士佐守  
暫ク愚案一ト申せ道ハ内ハ亡父草創始めより  
内府ト曰入魂ハ先年尾州小牧山合戦の時ト  
内府の臣子ト一ト大政ハ改做ハんとの内通ハ  
一ト一程あく和談調ハて其事ヤとぬ内府ト亡  
父ハ互ハ金蘭の思ハ有キ也知所ある古人ハ  
謂ハ父の友ハ見事父の志ハ一ト一ト長盛

ト父の友ありト一ト其厚薄ハ内府ハ父  
ト厚ク長盛ハ家ト親一我ハ捨テ父ト隨ハ孝  
子の道之然也ハ盛親ハ内府ト属多キハ孝ハ  
トセんと宣ハ一ハ当坐の既從皆誠ト道の当  
然義の至極ト考唯一途ト思一吾極ハ給ハ一  
ト申々家ト事ハ先使者ハ関東一ト一給ハ  
此心緒ハ述一ト一ト十布新吉街門町三郎吉街  
門外使者ト一ト一通ハ撥書を関東一ト一給ハ  
彼兩使夜日ト繼テ急ク所ハ長束大左右輔ハ  
洲水ト一関ハ急テ堅ク人ハ通キぬハ兩使也

内  
終  
皆



さうぬ事だ兼て其と此我但某彼市川と云く似  
う家知者や狭田ハ知の正神討て蒙る者一全  
く稀直と疑ひありとと陣一者其時又壹人進  
出て然らハ問答多てとあり石見ありハ云く見  
知り家子の有其れ此召せとて呼出せ彼者急き  
立出互に目と目此見合せり見ハ昔縁はらと枕  
をのつして日夜語りて家旧友あり彼者二目共  
見を横手びてりとおて情あり世ハ能く似し  
家子のと者と此我疑ひとあり石見あり但石見  
ハハ願ふ方刀痕の跡あり是石見ハ語ありと云

ありハ番人立より是知見あり又痕の跡ハあり  
者自扱ハ石見とてハありとと申者其誠ハ石見  
ハハと云く痕の跡ありと事ハ當時即妙の返  
答ハそ旧友の危急の難はと云ハ事ハ其やを  
ハハ是審人其猶疑ひや暗き事ハ其誠ハ稀直  
らハ祝詞はよめと申者其ハ石見家と傳ハハ鳴  
張の文は高らうと語と云ハハハ聞守者此文  
ハハ知ハ事ハ云ハハハ信取ハハ其通ハハ一銅ハ  
謀とて鱗の口ハ道は事ハ其知者ハ其指ハハ其ゆかし  
ハハ此外ハ一豊家の士ハ其追ハハ其結ハハハ其ゆかし

内  
終  
省

吾便也あしたしと加一山は越一川は渡りて  
皆難あく関は過ぎ大坂へと着るをいふ是の  
よあふを大坂方にて心をくは関東に通人  
以下を輩多しといふと関西は通を得ぬ  
人とは此中を彼十市町兩人の不覺にて関  
を越して歸るしといふ盛親の志関東一達せし  
の徒は制を為す家運の末にせうたてれ  
細川越中守内室自害の事  
去ふおとよ国々の軍勢馳せふ事毎日引ときら  
を雲霞のおとく馳集る大坂に居余りて近辺の

神社佛堂森林の陰をてと軍勢のやうな所は  
あつりり此勢一同は攻下ふ程あふ関東勢  
の戦はさふ先は波逆とせんと人内府の威  
勢は今暫くの程あふといふと口ふは旬て勇に合  
事斜あふを先事始は関東下向の面々の人質は  
取て車九は籠籠並に伏見の城をせ免と上と台  
一等は丈丈あしと関東一押下あしと評議は  
極め七月十九日細川越中守忠興の北の方大坂  
の屋敷に和をいふあし事外申すは使はせし  
て申す家此比世と物急は依て諸大名の妻子



う皆皆中一うあふは急死入城者一とと  
申せ世帯系北の方の返事は細美に於て城下  
に居申事と答へ一若し不意の事有らんハ早  
速に城へ来り候へ一其意は只私宅にまで  
答へと答へて詮ひ給へると事柄中義引あくと  
一異條より及び理不届は押入り召捕る一と  
難言より及び一北の方川北石見小笠原西高  
稻留伊賀とて三人の士は忠無為守居まされ一  
是うあは呼出して宣ひ事多し宰相及関東一は  
下は被成上ハ其妻子大質は事多し覺悟の

う一之然は此夜の企ハ幸新中私の宿意よ  
候て大臣及此亡きあ一きたるもの一木の一  
よ波一うまう一と知事あそく宰相及大臣  
及無二の味方あそく一うは城へ入あそく宰相  
及一のうらま本意あそく思し召はるらん其妻  
子歎の方よ有あそく味方の人よ疑ひ給へハ  
ん事ハ其悲し事れらるらんハ明智日向守の娘  
よて不意の若此子あはれハとて一軍家出せと  
りあそく父と程あそく討は給へハ一とあそく陰  
とあそく丹後の国の片布と里よ恐ひ居事多し宰相

内  
外  
省

内  
外  
省

相及波玉ひ有所妻無所歸去とりや奉文の事  
とて呼通を過再ひ見え事とありまといひ  
あうか此厚恩いしくとくといふ思ふ只りさ死さく  
自害しそ宰お及忠信の事い進め奉らん  
思ひ極めさういしくと其覺悟いせよと宣  
い何ととい義の事と由と後仰せよ其教とと信最  
後の信信仕事といひと教を物の具いしく  
とありぬ門破開古討手おとと待りけさう其  
日の暮程と城より人数二千斗寄来り信迎り余  
さう早くと出さとい口とよ旬とあり内と

開と返り思ふまゝと敵の引けを鉄砲を構へぬ  
らひと射立討立りしハ寄手ハ案子相違  
して見一書あり流石寄手ハ大勢ありハ堀越  
一門破て喚き叫て責入る所城内ハ朝一  
あ事ありとも思ひくよ打て出火花あちして戦  
ひりり痛のいや地の方守り刀は抜て十歳の男  
子ハ歳の女子はき殺し其刀にて自害し衣  
引うつきあし給ふありといとんうことあし  
正當是れ見て信臺若君生害被害と今ハ心  
易し思ふと戦ふて討死せよと呼とる長刀

門  
文  
書

と古て切て出ふ疎ふとの去河の橋に余は惜  
しむゆ記と走る怒りくきと死にせ死しとを  
不西富と石見の今に是よりあると内へ入る  
彼に央ゆけ兩人立並ひて声ゆけ一版に版  
切るをきき申ししうるしに路あり中よと箱  
苗伊賀の敵寄るといとく思ひ出ゆへと志す  
そ落失くし波人舌は離し至君侍輩は見捨るは  
ハ金道あり徳病之と悪く思ひ此のあうるは  
伊賀の後に入道して一夢とと申す侍若輩の鉄  
炮の上手ありしと其後当国にて大名家召出

き色くふとや各一藝者を不庸と方公望の勸  
學の詞とゆきしと此斯く審事の勢の繁は速は  
手は失ひゆきと果てとゆきしと軍の首途河  
事進ハ此後とてとものく委事ゆふしと忌思ハ  
ぬハあうるは山内對馬守一豊の北の方此由  
此波給ハ一豊より竹島に一版部表左衛門岡文  
左衛門喜外市川石見ゆとく士共ゆ召集ゆ對  
馬守層と越中守層と一味同心のほ事あはし  
つうとと今ハ道はぬ所あり敵寄来ふいとき  
よく自害せんをふと其用意せよと宣ハ何と

馬  
守  
層  
と  
越  
中  
守  
層  
と  
一  
味  
同  
心  
の  
ほ  
事  
あ  
は  
し

と畏れ考と物の具ひしくと指しこめ得たの  
此塙へて一同に討死と思ひ定め寄せ来ふ敵は  
待り多しと羊の歩と隙の駒逃げ命を何と道か  
ふも色とと幸仍達忠興の北の方又懲てや者多  
ん人質の入城はやりて只取逃せぬ様として  
所くの口は遠見の強番は跡多し程又寄手の  
所はありありと斬りし家の臣下共を  
あつと謀て主人の妻子達を盗と出ると多うり  
あり只りのよとて逃げ出るといふ事多しと  
城へ入る一とりのふありありと

伏見の城合戦の事

同日先利中納言輝元卿より秀頼公の足輕頭川  
口久助兼輝元の家臣島新七郎は兩使として伏  
見へ出ると其城は明使を一一と宣ひ事多し鳥  
居彦右衛門内藤孫次右衛門申事候は当城は江  
戸大臣より敵と預り其間内府下知ありわ  
るる事ありありと返答して兩使は  
返り若事あり大政より討手急よ来ふ一きと其  
用意せよと手分手配りありと下へ返り事  
不慮と若狭の少将勝俊は西の丸に居給ひり

伏見  
城  
合  
戦

の天性臆病もやあ、一孝人歎寄るとして故太  
閤北の政所ハ洛陽の三本木の居所におつて  
以是ハ少将の伯母とてまゝせ、此洛所守  
護せよ、一として城守人数引てそのあふ  
ききふ鳥居内藤是は見て、くく斯く不覺の人  
ハ惣子足手まといよあふとと申り、批て持  
り此堅めととて幸九ハ鳥井彦右衛門尉元忠松  
平五右衛門尉道政佐野肥後守綱忠石部小市郎  
笹山彦十郎西の九ハ内藤孫治右衛門家長次男  
小市幸長平四郎左衛門正治子息孫平次鳥左平

次大手の門ハ松平左衛門家忠洛部九ハ駒井猪  
之助名護屋九ハ岩間名彦頼甲斐左衛門松の九  
ハ深尾清十郎左衛門九ハ上林竹庵其所と守り  
り家城中の勢都合千八百余人之此由關東一統  
進せよとて腹部平三とて伊賀の忍の者をと  
きハ一多向去程と大坂ハ急に伏見攻よと  
て備前中納言を大将として大手搦手の手分  
て翌廿日の早天と大坂攻立て一勢くく押と不  
束の手ハ惣大将とて向つて、備前中納言秀  
家増田右衛門尉陣代石川民部目附ハ福西源

門  
洛  
山

次郎大岡作左衛門西人之去東大為大輔陣代家  
齊帶刀伴五岳御良の方ハ筑前中納言秀秋毛利  
豊前守吉政北ハ按使野村肥後守真隆子息兵衛  
賢真俊松浦伊子守旗本鉄砲頭鈴木孫市重朝伊  
藤孫吉出弘弓頭川口久助大若子ハ鍋島信濃守  
勝茂筑紫上野介善冬南条中務少輔忠成出常家  
部土佐守盛親高橋主膳正長昌寄合衆織田左衛  
門依信高同武藏守信吉同雅出介信貞堀田兵衛  
勝喜三洲大和守定貞平塚同膳守安廣亦村孫市  
右衛門生田源助秋田助左衛門熊谷半次郎糟谷

内膳正矢部豊後守伊藤加賀守駒井中務乾の方  
ハ毛利中納言輝光の軍勢毛利七郎兵衛元安出  
軍將子久留米侍從秀包吉川大祐右輔廣家色  
利讚岐守元政堅田兵部少輔廣澄福永越前守廣  
俊西ハ島津昌庫頭義弘入道惟新子息又ハ郎忠  
恒木都合惣軍四萬三千余人之南一方ハ熊と西  
幸多也九石中子と筑前中納言秀秋卿ハ元來関  
東一志一者了信伯母政所と兼て而一合ハ幸多  
子若者少也ハ伏見の寄手子此向も色ハ孫更  
舎等若狭少將ハ西ハ九子居給ハ幸多ハ内通セ

門  
卷  
首

らと事向所より將落失らしむる事ての支度  
相連しぬ事と今更事出資を以てしむる事  
是の城一人は是の事にて籠城すべし由申入り  
事れりと鳥居内藤義引せし頃日鳥居内藤入  
道籠城有る事と申入る事と内府の  
教しあり事故同意せしめを内府へ伺はしむ  
私に入事ふ事成候事と申事成中細言  
重て別心ありし事言を加へ使為る事及ひ事  
是の鳥井申事向所左より唯今士壹人関東へ下  
し仰の旨趣内府へ申入る事後日又忠義

法心のまゝ事給ふ事一は今城中へ入事ふ事  
ハ思ひとす事此等とて使はし返し伊塔田五左  
衛門と云々の事関東へ下し候事ハ中細言力及  
ハ事伏見へと寄らし事落城の後家老平岡石  
見神木清兵衛関東へ下し伏見に攻め事事云  
との次第とて止む事候得事此の事重て法合戦  
の事ハ忠義仕事一と委細事申入らし事事  
去初とて同廿六日より伏見の寄手仕寄を付  
息事候て攻事見ハ城中より事候事途と攻戦ハ互  
は勝負見ハ事向所より筑前中細言の家老松野主

鳥居内藤

馬の手より射り矢火矢法居り分て燃出り  
是は路の人と騒ぐ所深尾清十郎の同心の中  
秀秋の士搦鯛藤助の内通し松の丸より寄手出  
引入しこの城中防ぎ兼てと見一よ寄手此清十  
郎常と邪欲あり不義の形跡のありしハ  
組の者若深く惜て候は返し寄手と吹えし清  
十郎怒て防ぎ戦ひしの大勢も取返して生捕り  
てきて終り切らぬなり此勢は寄手大手の門  
破り家ありしと押入りなり中よと長曾家部  
士佐守盛親真向に進む二の九築地より押入不

所は松平主殿助家忠手のこの前後に随一菟向  
ひ出たきしと相討し盛親の家人木塚源八叔  
居田新六神通寺右衛門左衛門吉田左久馬久礼田  
ハ能呂御国取藤左衛門ゆきしハ究竟の士二十  
三人討死を家忠自身は鎧取て鬘と振ひて手  
の腹坪に突進暫く伏し居て下知し寄手の痛手  
ありハ人手よ掛りしと自害して死しなり  
究竟の家人八十五人一所よて討死を島居彦吉  
御門主殿助の自害ししハ御見て九層士の戦場  
よて賤切事ハ幸意に非ず商人ありしと敵に

内  
外  
書



討取切死に死を海に之元忠年老孫に先年三州  
 長篠の合戦に膝の口はりしは新歩心と経せ  
 とし一と若此輩に劣るはと独言して  
 長刀を以て切て廻り大勢に追ひ靡け思ふ方と戦  
 して鈴木孫市に出逢ひ終りて死しては生年  
 六十二歳之家人四十八人丁是と退りて極成  
 らして討息りり内藤孫次右衛門松平五右衛門  
 平岡孫左衛門子息孫平次島左平次箕山彦十郎  
 上林竹庵大さく學動て討死を其手の兵家人  
 至ふて壺人と強ひて死す切死に死

しりり中よと此上林竹庵と申八字流の茶  
 師あり常又内藤の用出兼て鳥居内藤の討一と  
 立入りしは此に所用と就て来りし所は像又  
 筆端とて一所は筆不居と望む事向鳥  
 居内藤無用之急帰ふと申事は竹庵こ  
 口ゆき事出仰せは我軍の調ハ金石の如  
 くと申傳へて我弓馬の家子生道を考としく  
 くと常又武士の志家又立入り考一八年ての武  
 の道は志して考考免考一とて赤手城にて  
 鉢巻一茶袋は美物ありて大死に常は震ひ終り

四  
 卷  
 三



去古幽室ハ宮津ノ城ニ居ル也此由分岐テ  
北ニ田邊ノ城ニ移ラシキ事宗徒ノ者其ハ越  
中守具シテ関東ニ下リ又家老者ハ近年信加増  
之リテ越中守豊後國本概出賜テ守禦ノ當彼地  
ヲ豊ハシテ節節ノハ折節勢ノ其アリキ也  
水刀屋造物井戸左馬助ト羽丹羽其子信右衛門  
當國ニ居合テ籠城ニ中ニ井戸左馬助ハ其先  
明智日向守光秀ノ屬シテ宇治ノ橋ノ島ニ居ル  
之ハ光秀没落ノ後ハ越中守忠興出頼ニテ丹  
後國ニ居ル事左馬助ノ妻子ハ光秀ノ姪

ト忠興ノ北ノ方トハ從弟ノ信ト依テ之又ト  
羽父子ハ當國ノ旧主波多野若金吾ノ家臣アリ  
之ハ彼家滅亡ノ後ハ在所ニ暫居シ事信ヲ去古  
招テ頼マシメテ之ハ上下ハ捨人斗ハテ馳來不  
ホ由合セテト五百人トハ過キ事去古程ニ  
寄手ノ惣軍田邊ト寄手ト云々ト竹東筆ノ  
甲突寄セテ攻怨不中トト山野木繼右助公郷ハ  
常ニ去古ト不和アリトハ討手ハ悦ハ群ト挫  
テ攻メヨリノ城中トト爰由雪隠ト防キ勤ハ城  
強クシテ落ハレ事トハ其アリト此去古法

門  
卷  
三



と其幸と意より出るは只旧好ゆ失と  
是人事以勤記思し吾我くとと和善ゆ取一記  
者丁寧之に内意又考必其同心簡要之其要細  
使者可令演説其恐惶頓首  
上田勘右衛門  
三好勘兵衛  
東條紀伊守  
細川玄吉法印  
幽富是汝披見し其返簡  
去九月廿七日之品紙紙今日相届令披見世と

之事余り不慮其不存者今更申之事旧者得共  
信長公此代故古潤之品時似合の致忠於道年  
二至て其懇の古事奉對秀頼公何より可致  
誅罪者此夜越中守關東出陣内府世間書後  
見の象是又奉公と存者如く際の外不及是非  
一兩日以前經ハ条及古使徳善院案内者古添  
下者別古今相傳之箱證明狀歌一首  
此短冊其源氏の抄箱一ツ二十一代集標裏ハ

進上仕貴此外知高衆一と草紙箱二進上後  
存生三思ハ孫ニ事多之満是ニ後唯今の手前  
の像ニ各間鬼角の事新申後陣ニ被怒目後  
ニ孫多後事多衆一也此通被仰後而可給後  
此外不申後恐ハ謹言ニ外事多後事多後  
八月三日... 細川法印去昔...  
東條紀伊守後... 田島右衛門後...  
好勤兵衛後... 夜光の玉古今

傳授の人としハ傳一ハり去思ハ当世ニ古今集  
傳授の人ハ此去昔法印只一人ハ此人ハくあり  
去ハ和哥ハ正傳永ハ断絶セ人更ハ帝ハ事紀思  
一召鳥丸右大禪光廣ハ此法印の弟子ありハ思  
ハ則勅使ト一ハ大坂ハ去ハ下也去思去昔法印  
宥免也一ハ和義去一ハト去思下也去思去昔大老  
事多畏去兼テ取テ丹後一人下下ハ勅定ニ依テ  
別像去ハ法印信教免所去所去早速和義を調  
一開陣也去去一ハト去思下知也去思下寄手ハ  
大将小野木縫後取此去一掃中一申入一ハりト

四  
卷  
終

法印敢て兼引せし寄手引取らば追懸討取ふ  
 一と奮て堅く守て降らざる所又三条大納言  
 勅使として宥め仰せり是れ一法印勅定の  
 多し事ありて感涙ありしなり此は鬼角と  
 恐見之として九月十二日城は明て後一  
 善院の長子兼田主膳正宗<sup>利</sup>城は受取在番と  
 して法印の高野山に引籠り居りしなり  
 府召出せし京都に居りしなり  
 上方人数職事之事  
 斯て大阪の詮據有て諸方一人數は指下

先伊勢路一、筑前中納言秀秋、毛利宰相秀元、  
 兩大將として奉りし長束大將、右輔正家、相從  
 小入、子、長曾我部土佐守盛親、毛利豊前守吉  
 政、安國寺惠瓊、吉川大將右輔廣家、毛利讃岐守元  
 政、鍋島信濃守勝首、岡本下野守宗憲、原隲岐守胤  
 房、氏家内膳正、筑前同志摩守、筑前内匠頭光  
 重、羽柴下総守勝政、他、田代伊守秀氏、新庄越前守  
 直定、中郷式部少輔直澄、山崎右京進、藤田権之助  
 正時、松浦安左衛門宗清、寺西下野守松浦伊豫守兼  
 秀頼公之旗本、弓鉄砲の衆、四頭都合、其勢三万

五千余騎伊賀伊勢志摩尾張山平均して海辺の  
勢と一ツの出来て箱根一押下り搦手より東國へ  
押入居ると命せらるる是れ毛利宰相秀元諸軍  
を帥して下らるる事あり中納言秀秋小島角延引  
して遙後濃州松尾迄下り彼所を陣取居  
らしき事は是頃東國内通に傳ふ之北國へ大津  
宰相高次を大将として軍鑑に大谷刑部少輔  
吉継此手に屬する輩より小川土佐守祐忠子息  
左馬助溝口大炊助昭坂中務左輔安昭同淡路守  
安元朽木河日守元綱大谷大學頭吉勝木下山城

守頼健奥山雅由助貞信寺西備中守定時戸田武  
為守重政同内記重宗赤座久兵衛直保平塚因幡  
守為廣木下宮内少輔利房丹羽備中守長俊上田  
至水正赤沢備後守加藤主膳池田豊後守彼是都  
合二万七千余騎越前國一指下り是越前加賀  
と味方の城より丸岡北の庄東郷郷庄中松大  
聖寺等之敵城ハ越前府中大野加賀と金沢斗ふ  
是ハ越中勢と降し合加州山納め越後へ入ると  
れより上州一押し下りあり東海道へハ備前  
中納言秀家公先として石田河部少輔三成警固

四  
卷  
三



と成て島津兵庫頭美弘入道惟新山西根津守外  
長福原右馬助直孝垣見和泉守家純然谷内右分  
直陣秋内長門守種実相良宮内少輔長每高橋右  
近長外伊東彦兵衛盛宗稻葉右京亮貞通竹中丹  
後守重門加藤左衛門直恭岡長門守一政木村宗  
左衛門丸茂三郎等衛兵在國の面々岐阜中納言  
秀信舍弟織田左衛門佐秀則石川備前守長吉遠  
藤小八郎種直高木十郎左衛門木都合喜勢四万  
余騎あり勢田の橋辺の在番より右田飛驒守一  
吉の各代同治美作守政吉立花左近將監宗茂稻

内務省

葉甲斐守亦の輝元出馬に於てハ先手世人當  
又仁州地と云ふ取地と云ふと云ふ事也  
大坂に陣する人々ハ先利中納言輝元と上將軍  
とて執事ハ増田右衛門尉長盛其外生駒雅  
樂頭近世木下若根守勝俊小出播磨守秀政久留  
米侍近秀包山野寺孫七郎細元堀内安房守氏喜  
織田上野介信包多賀山雲守高賢先利七郎長衛  
元康山崎左馬助家次木下周防守信重同右衛門  
大友信俊同美作守織田左衛門佐信高堅田兵部  
大友廣澄筑紫上野介家冬石川掃部頭頼明前田

内務省

左膳宗利片桐市正直盛早川主馬助長秀川尻肥  
前守直次南条中務少輔高政伊東氏部大輔祐兵  
蜂須賀阿波守家政毛利氏部少輔高政宮本丹波  
守豊盛木下左京管三郎兵衛同右衛門八幡中伊  
豆守富村左兵衛杉若越前守横濱氏部少輔寺田  
播磨守木村孫市右衛門塩屋隱岐守岸田伯耆守  
服部土佐守長束兵部大輔精彦内膳具外寄合衆  
長秀頼公旗本七組弓鉄炮の頭初めとして  
人数九七万余騎之を家ありと攻下り人々居城  
へ歸り軍地はもと有又直に大坂より祭向と居

人との思ひ心くよあ立り中よと石田治  
部少輔三成の八月五日佐和山へ歸り此の不  
と休息して同日人数を出し一番島左近藩  
生備中を大将として二千余騎其日赤坂に着  
二番前野兵庫中島宗右衛門少軍將として二千  
余騎壘井に著治部少輔其身八九日に出陣せし  
る今日小悪日之家臣寺島謙忠寺島忠三  
成用ひて六千余騎は從へて壘井より一同に還宿  
して大垣の城主伊藤長洲守の家老伊藤頼母同  
伊豫守江尻とりし妻一呼とせ当城に備を成り

一、云々の長門守のよしと思ふて  
 一、返答及の事所より同日平塚出  
 一、大勢理不居に押入し、長門守  
 一、及の勢を引て城出合村に陣を急て  
 一、居る事、去程は伊勢口河津駒野に  
 一、備生備中軍將とし、人数三千、美濃ハ  
 一、敵の通路絶死す、相原彦右衛門又  
 一、松田十右衛門、瀬左馬助、大西善右衛門、木三千  
 一、騎、岐阜の加勢とし、相原彦右衛門、貞通、其子  
 一、彦右衛門、一通、長門守一政、加藤右衛門、尉、竹中丹

後守を、大山、加勢、三、成、家、身、の、四、千  
 余騎、大垣、と、籠、り、此、外、味、方、の、城、々、と  
 一、江、州、水、口、と、長、束、大、藏、左、輔、と、伊、賀、守、と、百、余  
 騎、勢、州、龜、山、と、岡、本、下、野、守、と、百、三、十、騎、神、戸、と、羽  
 柴、下、徳、守、と、百、余、騎、衆、名、と、氏、家、内、膳、正、と、百、八、十  
 騎、濃、州、福、来、と、丸、丸、三、郎、共、御、此、等、の、皆、陸、路、出、る  
 多、く、海、上、の、伊、勢、島、羽、城、主、九、鬼、大、隅、守、喜、隆、共、来  
 島、某、管、平、右、衛、門、等、賊、船、數、百、艘、と、取、衆、伊、勢、尾、張  
 の、津、く、浦、く、守、徳、せ、し、海、陸、の、道、塞、り、て、関  
 東、勢、の、上、に、得、ん、事、の、思、ひ、絶、つ、事、之、を、思、ふ、と

大山の加勢稲葉加藤関竹中ホの人々皆関東一  
内通せしむる腹心の積聚虚を第一しむる病  
ふ出来んをふんと却てさうふして覺束あし安  
ふ遠藤但馬守常利ハ郡山の城主稲葉右京亮父  
子大山の加勢として指筆あはせて郡山の家旧  
領あしハ素に案内らととあし留守の隙は伺ひ  
乗取あしとして西尾豊後守政照金表出雲守の  
隔し合せ郡山よ却てまて搦てそ責うと事  
ふ城の預り稲葉修理同土左入道四方を下知し  
紫垣甚右衛門那波五左衛門中村方郎右衛門力

寺行  
平川  
殿

戦して勇功は顯しをききると城中勢微ふ事  
ハ防犯兼て大山ハ急に告ぐりしむる右京亮大  
きと知とら此父子相告又馳歸り寄手の陣ハ蒐  
入り火はあらしめて相戦ハ城又入て息絶りふ  
敵陣ハ人を出さしうねて関東ハ内通せしむる  
を申せせ事と遠藤叔と同土軍より其河邊と  
て和の遺恨は捨勢は引て歸りり  
福来城責の事  
中と福来の城ハ大垣ハ其間僅に一里ありて  
伊勢より川舟よて兵糧運送の便に宜しむる

勢  
省

とて此城は構一丸也其庫頭其子三郎其衛人数  
二百廿年して楯籠不尾別赤目の佐人横井伊織  
ハ内府の方人之事高の其庫頭ハ親友の好と深  
り思ハ其庫頭の家光九毛六郎其衛呼て大坂  
よりハ幸書ハ上意ハハ何事ハ中ハ私事  
内府ハ降系ハ高給ハハ理を尽ハハ云也ハ  
ハ其庫頭是ハ彼ハ我欺ク一門者属徒類ハ至  
迄安楽ハ任事ハ故方周の厚恩ハ其厚恩を  
忘シテ幼主ハ敵ハ事道ハ人ヤハハ事ハ  
私ハハ何事ハハ上意ハハ何事ハハ上意ハハ何事

是ハ疑ハ背ルヤ重ねテハ何事ハハ何事ハハ何事  
と六郎其衛ハハハ横井此由を彼ハ旧友ハ  
ハハハ是マテハハハハハ同若孫其衛門  
同始其衛門徳永法印市橋下徳守彼是合テ二千  
余騎八月十七日福来ハ押寄不是ハ彼ハ福来ハ  
加勢トシテ長橋の城主武光式部其外大垣ハ  
ト人数ハハハハ其庫頭二千余騎ハハハ  
村ハハハ出陣ハ隔時ハ声ハハハハハハハ  
時をうハハハハハハハハハハハハハハハハ  
左衛門竹内四郎左衛門ハ当國の地士ハハハハハ

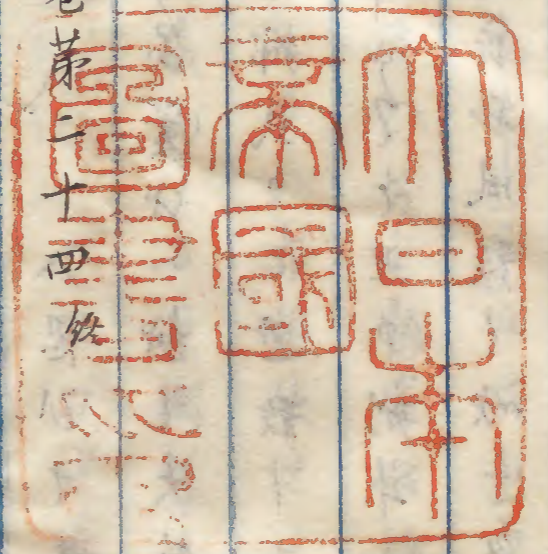
内務  
勢



如外を追詰く討取り里丸を頼と切ら西  
 照十左衛門父子信谷方左衛門返し合せし終り  
 室より討死し市橋取城子入人数少と籠り  
 不丸を後に入道して道知と号し加州の片不  
 と里子居るなりとと傳ふ



土佐物語卷第二十四終



明治九年十二月二十一日

奥田正志

鈴木安襄

校

月 終





